

## 平成 18 年度藤沢市国際教育推進プラン報告書

## I 藤沢市における国際教育への取組

## 1 藤沢市の現状

藤沢市は人口ほぼ 40 万人、神奈川県においては、横浜市、川崎市、相模原市、横須賀市に次ぐ県内 5 番目に人口の多い都市で、南は風光明媚な江ノ島を擁する観光地として、古くから栄えていた。南北に小田急線が走っており、湘南台駅は相鉄いずみ野線、横浜市営地下鉄、小田急線の 3 線が乗り入れ、北部の中心地として、近年急速に開けてきた。湘南台駅の西側には、いすゞや IBM といった大企業を中心として、桐原工業団地と呼ばれる工場が建ち並んでいる。

この地区は、1985 年に開設されたインドシナ難民定住センターがある大和市と隣接していることから、多くの外国人が工場の労働者として働くことになった。その後、1989 年の出入国管理法の改正で、日系人の在留資格要件が緩和されたことにより、藤沢市の外国人登録者数は 1992 年には 5,000 人を超え、2006 年 2 月現在で、ほぼ 6,000 人に昇っている。

市内には小学校 35 校、中学校 19 校、特別支援学校 1 校の 55 校の市立学校があり、小学生 22,262 名、中学生 9,559 名、高等部生 30 名の計 31,851 名が学んでいる。外国籍児童生徒の数は、この 10 年間はほぼ 250～300 名で推移しており、今年度は、294 名の児童生徒が在籍している。

国籍別にみると、ペルー、ブラジル、アルゼンチンの南米 3 国で、61% を占めている。近年の傾向としては、ベトナム国籍の児童生徒が横ばいか減少で、フィリピン国籍の児童生徒が増えている。

外国籍児童生徒が在籍する学校数は増えている。今年度は公立小学校 35 校中 28 校、中学校 19 校中 17 校に在籍しており、ある地区に集中していた以前に比べて市内全域に分散してきている。

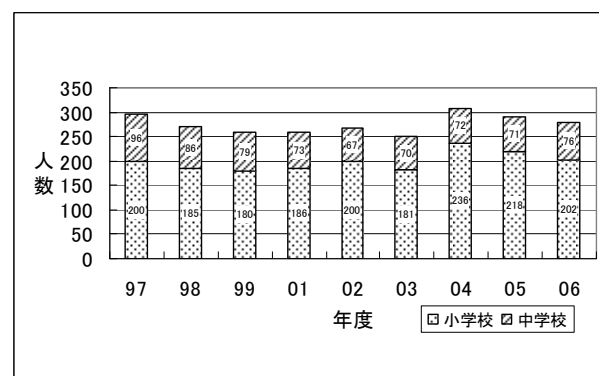
日本語指導を必要とする児童生徒は 119 人で、外国籍児童生徒 100 名と日本国籍を保持してはいるものの日本語を第二言語とする児童生徒 19 名が含まれている。市内には日本語指導教室設置校 1 校、国際教室設置小学校 5 校、中学校 1 校とで、84 人の児童生徒が学んでいる。

&lt;藤沢市の外国人登録者数&gt;

	国 籍	人 数	世帯数
1	ブラジル	1,094	671
2	韓国・朝鮮	908	583
3	ペルー	829	461
4	中国	778	525
5	フィリピン	404	379
6	アルゼンチン	383	243
7	ベトナム	284	118
8	その他	1,290	1,069
	合計	5,970	4,049

※2006.2 月現在

&lt;公立小中学校における外国籍児童生徒数&gt;



(2006.5.1 現在)

&lt;日本語指導を必要とする外国籍等児童生徒&gt;

	小学校	中学校	計
在籍校数	28 校	17 校	45 校
日本語指導必要数	97 人	23 人	120 人
国際教室入室者数	77 人	7 人	84 人
内日本国籍保有者数	10 人	3 人	13 人
日本語指導員指導数	71 人	21 人	92 人

(2006.5.1 現在)

## 2 研究への取り組み

1992年6月に日本語指導教室が開設された湘南台小学校では、早くから、外国籍等児童が日本で生きていくためには、外国籍等の児童に対する日本語指導だけでなく、一緒に学んでいる日本人児童に対する異文化理解教育が不可欠であるとして、国際理解教育に取り組んできている。2004年からは、総合的な学習の時間や社会、音楽の時間に教員と学生が共同開発した「宇宙船地球号」カリキュラムの実践を行っている。

平成17年度文部科学省から「帰国・外国籍児童と共に進める教育の国際化推進地域事業」の委嘱を受け、藤沢市教育国際化推進連絡協議会を設置し、湘南台小学校を中心に研究を進めていくことになった。

湘南台地区は三者連携（学校・家庭・地域）や、地域協力者会議、青少年育成協力会など、地域が子どもたちの育成に積極的に関わってきている地区で、2004年、湘南台中学校がオーストラリアから来た学生をホームステイなどで受け入れたことをきっかけに、国際交流への関心が高まっている地区でもあった。隣接地区の東勝寺もお寺での座禅体験をお願いしたところ快く引き受けてくださった。その後、地域に住む外国人やその子どもたちのために何かできないかということで、そばうちやお月見の会など、本堂を開放して、さまざまなイベントを行っている。

また、日本語指導教室開設直後から慶應義塾大学の総合政策学部の平高教授が協力を申し出てくださり、学生の日本語指導教室での支援や日本の学校紹介ビデオの作成などに尽力してくださった。また、文教大学国際学科国際コミュニケーション学部の山脇助教授がスペイン語新聞に書いた記事をきっかけに、湘南台小学校の日本語指導教室と関わりを持ち、学生ボランティアを立ち上げてくださった。

このような人々が連絡協議会の委員となり、湘南台小学校の外国籍児童に対する支援と一般教室における国際理解教育の推進のために月一回会議を開き、活動の推進を図った。

2005年5月には、総合的な学習の時間（国際理解）の授業で行ったペルーの日系人学校ラ・ウニオン校との交流をきっかけに、ラ・ウニオン校のサッカーチームの生徒12名が来日し、湘南台地区にホームステイすることとなった。東勝寺でも指導者と子どもたちに宿を提供したり、歓迎会を行ってくださったたり、地域の方もホームステイや入浴の提供などを行ってくださった。

平成18年には、新たに文部科学省の新規事業「国際教育推進プラン」の委嘱を受け、前年までの研究を引き継ぐと共に、さらに、北部の小中学校だけでなく、高等学校にも協力を要請し、小・中・高・大学の連携のもとで国際教育の推進を図ることとなった。

## II 平成18年度藤沢市国際教育推進プランの概要

### 1 課題やねらい

藤沢市における外国人登録者数は年々増加しており、今後もこの傾向が続くことが見込まれる。現在、公立小・中学校54校中45校に300名以上の外国籍等児童生徒（日本語が話せないが日本国籍を取得している者を含む）が在籍している。

外国人に差別や偏見を持たずに、共に生きる、よりよい社会を作っていくためには、外国籍等児童生徒の適応指導や学習支援だけでは不十分であり、日本人の児童・生徒に対する働きかけが不可欠である。

児童生徒が主体となる様々な学びの中で、多文化共生の視点を育てる国際教育の実践は、日本人と外国籍等児童生徒の相互的な学びを可能にする。また、違いを受け入れ、互いを認め合

って生きて行こうとする態度を育てることができる。そのために、湘南台の特性を生かした国際教育のカリキュラムを編成する必要がある。

また、学校が、地域の人々のセンター的存在になることにより、地域に住むさまざまな立場の人々が、多文化共生社会について語り合い、互いの文化、習慣、言語を学び合うことにより、地域における異文化理解が促進され、地域レベルでの共生社会がより発展していくことが期待できる。

## 2 活動内容

### (1) 中核校

学 校 名	所 在 地	児童・生徒数	教員数
藤沢市立湘南台小学校	藤沢市湘南台5-23	883	36

### (2) 協力校

学 校 名	所 在 地	児童・生徒数	教員数
県立湘南台高等学校	藤沢市円行1986	668	44
県立藤沢総合高等学校	藤沢市長後1909	697	45
藤沢市立湘南台中学校	藤沢市湘南台7-18-1	523	40
藤沢市立高倉中学校	藤沢市高倉1122	403	30
藤沢市立六会中学校	藤沢市亀井野1000	651	32
藤沢市立長後小学校	藤沢市長後770	905	45
藤沢市立富士見台小学校	藤沢市下土棚591-1	626	38
藤沢市立六会小学校	藤沢市亀井野550	1122	51

### (3) 協力団体

#### ①協力団体

慶応大学湘南藤沢キャンパス学生ボランティアグループ **JUMP**

文教大学湘南校舎学生ボランティアグループ **HOP**

- ・湘南台小学校等の日本語指導教室に通級している児童・生徒の学習支援・一般教室での国際教育の授業実践等、湘南台フェスティバル等の行事の企画
- ・外国籍児童・生徒の保護者のためのビデオ「Papa・Mama VIVA」翻訳版作成支援

#### ②JUMP 及び HOP の関わり

本市にある慶應義塾大学と茅ヶ崎市にある文教大学の学生ボランティアグループが、湘南台小学校の日本語指導教室における日本語指導支援・学習支援だけでなく、日本の小学校の紹介ビデオ作成（日本語・スペイン語・ポルトガル語）や教材作成を行っている。また、外国籍等児童が在籍する母学級の教師と共に一般教室で国際教育の授業を行ったり、行事の企画を立てたりなど、多岐に渡って活動している。

国際教育の授業実践は、日本語指導教室に通級している児童だけでなく、日本人の児童も「異文化」「異言語」を学ぶという目的で、担任と学生が話し合いながら、授業づくりを行い、総合的な学習の時間、社会科、音楽などの時間で実践している。学生が関わることによ

り、新鮮な感覚で国際教育を実践できる。また、両大学の先生方も積極的に関わり、学生に対し指導助言を与えている。

平成16年度からは、湘南台小学校と学生が共同開発した『宇宙船地球号カリキュラム』を実践して、平成17年度文部科学省地域指定研究の「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」事業の「研究報告会」では、5クラスで実施された授業研究発表に指導協力者として参加し、高い評価を受けた。

さらに平成18年度から、湘南台小学校教職員における校内研究の中に「国際理解部」が設立されたことで学生と教職員の連携がスムーズになり、『宇宙船地球号カリキュラム』の学年別カリキュラム化に向けて発展的に授業を展開中である。

#### (4) 活動テーマ

##### ①グローバルな課題や地域の特性を生かした取組

湘南台付近には、工業団地や中小工場が多数あり、特に南米系の外国人労働者が多い。その子どもたちは、湘南台・長後・富士見台・六会小学校や、湘南台・六会・高倉中学校に在籍しており、特に湘南台小学校に集中している。

近年、日本で生まれ育つ外国籍の子どもが増えている。日常会話の日本語も日本人とほとんど変わらないが、母語は日本語ではなく生活様式も異なっている。そのような児童生徒の中には母国の文化や言語的背景を生かせずに学校生活を送っているものもいる。外国籍等児童生徒が自分らしく生きるためには、日本語指導や日本社会への一方的な適応を促すだけでなく、日本人児童生徒の意識を変える必要がある。湘南台小学校では日本人と外国籍等児童が互いの違いを認め合い、共に生きていくために、総合的な学習の時間や各教科、学校行事を通して「自己実現的な学び」・「相互的な学び」を目標に掲げて、国際教育に取り組んできた。

湘南台地区では、「三者（学校・家庭・地域）連携」「地域協力者会議」や商店街など、地域の人と学校が協力して様々な活動が活発に行われている。外国籍の人々に対しても、積極的に働きかけ、互いに交流を図る機会を持つという機運も高く、お寺を会場にした交流会も行われている。また、湘南台駅は慶応義塾大学、文教大学行きのバスの発着点となっており、それぞれの学生が湘南台小学校に通いやすい環境でもある。

このような環境を生かし、湘南台小学校で取り組んできた「国際理解」「多文化共生」を地域と一体化して進め、協力校にも広げていく。

##### ②小・中・高一貫した取り組み

湘南台周辺に在住の外国人は定住化しており、子どもに日本で高等学校・大学へと進学させたいと願う親が多い。しかし現実には、学習言語の習得や学力の定着には時間がかかる。また、言語の問題によって、中学校や高校の段階で不登校になったり退学したりするケースも見られる。小・中・高の教員が協力して、外国籍等児童生徒本人や保護者に対する支援を行う体制作りが必要である。

教員ワークショップを各学校で実施することで、個々の教員が国際教育の必要性を理解し、外国籍等児童生徒の指導上の悩みを共有することが必要である。また、小・中・高・大の児童・生徒・学生が一貫して系統的に取り組む「宇宙船地球号カリキュラム」を開発し、実践することによって、より発展した内容の展開が可能となる。

## ③ITの活用

2004年から、総合的な学習の時間で「言語と文化に対する感性を養い、多様性を学ぶ」という授業の一環として、ペルーの日系学校ラ・ユニオン校との交流が始まった。交流が深まる中で、ペルーの児童と直接交流したいという声が多く聞かれるようになった。そのような中で、2005年5月にラ・ユニオン校の児童が来日し、湘南台地区でホームステイや日本の学校の授業を体験した。その後も交流は継続されており、慶応大学の施設を使ってラ・ユニオン校とテレビ電話での交信を行う計画がある。ITを活用してリアルタイムで直接交信することで、地球の裏側にいる人々をも身近に感じて、異文化を自分の生活に取り込むことができ、児童の視野を広げることができる。昨年8月に交信テストを試みたが、14時間の時差や季節の違いにより、児童間の交信にはいたらなかった。今後さらにインターネット環境を整えることや、交信のあり方について研究していきたい。

## ④国際交流の取り組み

湘南台小学校では、ペルーの日系人学校の子ども達とビデオレターや手紙の交換以外にも、ペルーやブラジルの音楽を聞いたり、フォルクローレを踊ったりする授業を行っている。授業を行う中で、日本人と外国籍の児童双方に変化が見られた。日本人児童にとっては、今まで知らなかった文化に接して、同じ教室で学ぶ外国籍児童に対する見方を変えるきっかけとなった。また、ペルー籍児童にとっては、母国や自分のルーツに対して誇りを持ち、セルフエスティームを向上させる機会となった。他の外国籍児童にとっても自己の存在価値を再認識し、主体的に行動する態度を育成する機会となった。

## ⑤地域に広がる国際理解

湘南台地域では、日系ペルー人学校の生徒やオーストラリアの学生のホームステイの受け入れを機に、餅つき・そば打ち・懇親会などの行事に積極的に外国人を受け入れるために、様々な取組がなされている。「湘南台祭り」や「湘南台ファンタジア」などの地域商店街の催しに、ブラジルのカーニバルや、ペルーのフォルクローレを取り入れたことがその一例である。

また、地域協力者会議をはじめ、湘南台に隣接する高倉地区にある東勝寺では、スペイン語・ポルトガル語・日本語の「語学学習会」やいろいろな行事を定期的に開催し、外国人と共に暮らす街作りを模索している。地域在住の外国籍の人々も、日本人と関わりを深めており、ペルーの雑誌や新聞でも、このような交流は大きな意味を持つと報道されている。

外国籍等児童生徒及び保護者が地域の一員であることの自覚を促し、日本人が彼らを「共に生きる地域の人」として受け入れようとする湘南台地区の取組は他の地域の多文化共生のモデルとなる。さらに地域の人々と協働して、多くの人々を巻き込んでいく取組を進めたい。

## (5) 今年度の実践内容

## ①「宇宙船地球号カリキュラム」の開発

「多文化社会の中で共に認め合い育ち合う子どもたちの育成」を目指して、総合的な学習の時間を柱に、社会・国語・音楽・家庭等の教科との関連で、カリキュラム編成を行っている。2004年から今まで実践した教材やアクティビティを系統化し、学年や児童生徒の実態に即したカリキュラムを作成中である。同時に、新しい教材を開発し、実践を行っている。

今年度もJUMPやHOPと連携し、「色々な国とつながろう」というテーマで授業実践を行った。また、ペルーの楽器であるサンポーニャの講師に、音楽の時間に指導してもらったり、「色々な国の歌」というテーマで音楽の時間に鑑賞したり、総合的な学習の時間以外にも音楽、社会、国語など、教科横断型の授業を行っている。

さらに、小・中・高一貫した取組ができるよう、系統性のあるカリキュラム開発が必要である。また、「宇宙船地球号カリキュラム」のビデオを作成し、広く活用されるようにする。

## ②外国の学校との交流

一昨年来日したラ・ユニオン校や、2008年に来日予定のヒデヨノグチ校など、ペルーの日系人学校との交流を行っている。特に、ヒデヨノグチ校とは、来日した際に会うことになる現4年生を中心に、「外国の友だちにカードを送ろう」という授業の中で、スペイン語と日本語での手紙やビデオレターを交換し、交流を行っている。また、ITを活用し、ビデオ会議システムを利用した直接の交信についてもテスト通信を行った。現段階では、時差の問題や相手の機材の問題などがあり、実現に至っていないが、今後、児童が直接交信できるよう工夫していく計画である。ペルーの日系人学校ヒデヨノグチ校では、自分たちのルーツを探ることや、湘南台地区との交流を目的として2008年度に、子どもたちを渡日させたいという意向を持っている。また、野口英世博士の故郷である福島県猪苗代町訪問の希望もあるので、湘南台地区と猪苗代町が共同で受け入れる体制を作り、ペルーを通して、猪苗代町・湘南台の三者の児童生徒が相互交流するために、連絡を取り合っている。

## ③外国籍児童生徒のセルフエスティームを高めるための取組

国際教育の授業でペルーのヒデヨノグチ校との交流やサンポーニャの講習会、スペイン語講座など、外国籍児童の母国の文化を日本人児童に紹介し、異文化理解を図るとともに、外国籍等児童が自国の文化に対して誇りを持てるような授業を構成している。運動会でも、日本語以外に、外国籍等児童がスペイン語とポルトガル語でアナウンスを行い、自国の言語に対する愛着が持てるようにしている。家ではスペイン語やポルトガル語を使っている児童でも、人前で母語を話すことには抵抗がある。初めのうちは躊躇を見せたり、やりたがらなかったりする児童が、アナウンスを成功させることによって自信を持つことができる。他の児童も、外国語が話せる児童に対して尊敬のまなざしを向ける。そのことにより、さらに自信を深めていく、という良い効果がでていく。

湘南台地域のフェスティバルに参加することを目指し、ペルーの踊りであるフォルクローレの講習会を行ったところ、外国籍・日本人児童30名近くが参加して熱心に練習を重ね、当日は大成功であった。国際教室担当教員配置校連絡会が主催する「なかよし会」で、大人たちの前でも披露し、称賛された。

これらの取組を通して、外国籍児童が自国の文化に対する愛着や誇りを持ち、自己の存在を肯定的に捉え、セルフエスティームを高めることができている。

## ④外国籍児童のための日本の学校紹介ビデオ『VIVA』の多言語化及び続編の作成

前作では、小学校の1日の様子をビデオ化したのが、現在、入学手続きや学校行事（必要な物）等、外国籍児童生徒の保護者のためのビデオを制作中である。現在は基本構想ができあがり、撮影を行っている。前作はスペイン語とポルトガル語であったが、今回はその他に、ベトナム語・中国語・タガログ語・英語版を作成する予定である。

日本語ができない外国籍の保護者に対して、入学説明会や懇談会等で活用してもらうために

市内各校に配布する。

⑤外国籍児童のための漢字指導法の開発

伊藤信夫氏が開発した、古代文字を使った漢字の指導法を日本語指導学級で試みたところ、それまで漢字が苦手と覚えられなかった児童も漢字に興味をもつようになり、積極的に学習するなどの効果があった。そこで、外国籍児童・生徒の漢字指導法として、出版社と共同して、スペイン語とポルトガル語での教材化を進めている。今後は、ベトナム語・中国語など多言語化していく計画である。

⑥外国籍等児童生徒のための日本語指導教材開発

初期指導のみならず、生活言語の習得が困難な外国籍等児童生徒のための教材を開発し、多言語化する。また、指導教材のDVD作成を行う。

(5) その他の取組

①湘南台祭り・湘南台ファンタジア

ペルーやブラジルの模擬店

外国籍児童生徒と日本人児童生徒の協同による踊りの披露

外国籍の保護者等の民族舞踊

②東勝寺における活動（外国籍児童・保護者と地域住人・学生ボランティア）

春…茶道の会・竹の子堀 夏…夕涼み会・流しそうめん

秋…お月見の会・そば打ち 冬…忘年会・新年会

地域語学学習会（スペイン語・ポルトガル語・日本語・その他）

③「手をつなごう会」

1～2ヶ月に1回、湘南台公民館で開かれる異文化研究会『身近な多文化共生をめざして、慶応大学湘南キャンパス・『ヒューマンセキュリティの基盤』としての言語政策研究グループ主催の会（代表 平高史也氏）が、2004年3月から実施された。

藤沢地区在住の外国籍の人々の問題や課題について、1回に2人のパネリストが話し、ディスカッションする。大学教授・学生・外国籍の方々・日本語指導ボランティア団体・学校関係者・東勝寺住職等多岐にわたる人々がパネリストとなっている。1回に15人程度の参加があり、様々な課題について討議がなされている。

(6) 組織及びワークショップの開催（次ページ組織図参照）

○ 教員ワークショップ … 中核校、協力校の教員、藤沢市の初任の教員を対象のワークショップを開催した。

・教員ワークショップ…山脇助教授による講演、いいところ探し、バーンガ

・初任者研修における国際教育ワークショップ…部屋の四隅、バルンバー人調査隊、いいところ探し、フォトランゲージ、バーンガ

これらのワークショップを通して、国際教育に対する認識が深まるとともに、外国籍児童生徒の置かれている立場やについて理解が深まり、各クラスでの実践の意欲につながった。

○ 地域ワークショップ … 東勝寺を会場に、地域協力者会議、手をつなごう会、地域住民、地域に住む外国人を対象のワークショップを行い、互いに交流を図った。